

第六回 『55歳からのハローライフ』と、

彼と巡礼と帯

考



「ウマシカよ、
やわらかくトンがれ！」

“UMA-SHIKA, be ton-bitious!”

弦楽器イルカ + 友人

「リトル・ピープル」とは何かをここで〈完全に〉解明しよう。

《その1》 見えないルールともう一つの世界

長くひっばってしまって、申し訳ない。『1Q84』を読み返し、分析や検討をしていたら、時間がかかってしまった。

でも、待ってくれた人がいたとしたら、その極々少数の人たちはラッキーだ。なぜなら、これまであなたがけっして解くことができなかつた答えがここに書いてあるからだ。

さあ、リトル・ピープルとは何かをここで〈完全に〉解明しよう。

『1Q84』はシュールな作品だ。ちょっとニュアンスを修正すれば、シュルレアリスムに属する作品だ。

本物の月の隣にもう一つの小さな月があり、宗教団体の教祖が念力で置き時計を宙に浮かせ、性交がないのに妊娠する女が描かれ、死体の口から不気味な小人が出てきて世界を変えようとしているから？ いや違う。

それだけではシュルレアリスムな作品とは言えない。ファンタジー小説やSF小説も、その程度のことなら余裕で登場するだろう。

『1Q84』がシュールだと言えるのは、そういった内容のことではなく、作品と世界の関わり、作者と登場人物との関わり、書籍と社会との関わり、それらが非常に特異な構造をもって私たちと関係を結ぶからである。

たとえばこういうことだ。

「これはパイプではない」とタイトルが書かれた、パイプの絵がある。この絵画の作者はシュルレアリスムの画家ルネ・マグリット。

キャンバスに描かれているのは、誰もが知っているパイプであり、それ以外には何もない。不思議な点はただ一点、そのタイトルと絵が一致しないことだ。あきらかにパイプの下に、はっきりと「これはパイプではない」と書かれている。

私たちにどこからどう見ても、この絵がパイプにしか見えない。

不条理な作品と思われるが、ミシェル・フーコーは同じタイトルの著書『これはパイプではない』で、この作品の謎を解き明かした。言い方を変えると、作品を狂気から理性の世界に配置することに成功した。

だが、いったいどのようにして？

答えの例はこうだ。

- ・このパイプは片一方の側面しか描かれていないが、向こう側がどうなっているかわからない。
- ・これはパイプの絵であり、パイプそのものではない。

- ・「これ」は、言葉であり、つまり指示語であるので、パイプそのものではない。
- ・「これはパイプではない」と絵の下に書かれているからといって、それがすぐ上の絵を、指示しているとは限らない。

そのほか、様々な答えをフーコーは書いている。この答えをみて腹を立てた人もいるかもしれない。

なぜ、腹を立てたのか？（あとでリトル・ピープルが腹を立てていることについて触れる）

それはフーコーの答えが、見えないルール違反であると感じたからではないだろうか。「そんなのズルい」と感じたからではないだろうか。

ここでいうズルいとは何か。自分が所属している社会のルールが違反されると、人は不安を感じ、違反者に対して攻撃的な感情と、違反を排除しようとする心理が生まれるようにできてる。そういうことだろう。

見えないルールとは、たとえば、「絵の下に書かれた言葉は、その絵を指示しなければいけない」とかそういうものだろう。このルールはなぜ暗黙なのか？暗黙であることに意味があるのか？非常に興味深い話が「1Q84」からそれるので、これ以上は触れない。

『1Q84』に話を戻すと、作品に書かれた内容が、私たちの現実合っていない。たとえば、月の数が違う。しかし、この小説と現実を一致させることに意味があるだろうか？あるいは、一致していないことにどんな意味があるだろうか？小説と現実の相互関係によって、見えてくるものは何であろうか。見えていないルールとはなんであろうか？フーコーがシュルレアリスムの絵画を解きほぐした時と同じ視点をもって、リトル・ピープルとは何かを＜完全に＞解明しよう。

だが、「1Q84」の世界は想像以上に入り組んでいる。まるでスパゲッティのようだ。そう「1Q84」はまるであのスパゲッティの話のようだ。

さて、これから文中の言葉を引用しつつ、この絡まりを丁寧に読みほどこいていこう。

《その2》『1Q84』はベストセラーであると同時に、ベストセラーについての物語でもあるということ。

いうまでもなく、村上春樹が書いた『1Q84』は社会現象をも巻き起こしたベストセラーであるが、同時に作品中の『空気さなぎ』も作品中でベストセラーになった。実はこの二重性のなかに、リトル・ピープルの謎を解く鍵が隠れている。

天吾が『空気さなぎ』を書き直す前も、それは他の人に読んでもらうための物語だった。

それはどう見ても、ほかの誰かが手にとって読むことを前提として書かれた文章だった（1-p128）

そして『空気さなぎ』を書き直して世に出せば、世間がひっくり返るほどの衝撃を与えられると

小松は考えていた。「二人で力を合わせて世間をひっくり返そう（1-p124）」

『空気さなぎ』はその魅力的なストーリーで、人々の心をとらえ、ベストセラーになった。言い方を変えると、社会に広く拡散された。作品『空気さなぎ』は、「物語」を効果的に広めるのに一役を担った。天吾や小松の存在、さらには、出版社や書店の存在と同じく、『空気さなぎ』は、「物語」を繁殖させるための装置（乗り物）なのである。

『空気さなぎ』あるいはその元になった物語はどんな内容なんだろうか？ ふかえりの保護者である「先生」はこう言っている。

「興味深い物語だ」「すぐれて暗示的でもある。しかしそれが何を暗示しているのか、正直なところ私にはわからない」（1-266）

先生に限らず、作品『空気さなぎ』が意味していることは、「1Q84」の登場人物には見えていない。なぜなら『1Q84』において、『空気さなぎ』の本質は、書かれることで満足するものではなく、その中身が重要なものでもなく、発表され、販売され、多くの人に読まれることにあるからだ。内容やその意味は二の次である。

一方、『1Q84』のなかで、3ページほどに渡り冗長すぎるほどに引用された『平家物語』だが、作品のなかで異様に感じられないだろうか？

『1Q84』の読者のなかには、この部分を読み飛ばした人もいるだろう。

でもなぜ、これほどまで、具体的に『平家物語』が書かれなければならなかったのだろうか？ しかもよりによって『空気さなぎ』を紹介するべく設けられた記者会見のシーンで。

『空気さなぎ』の具体的中身にはほとんどスペースを割いていないのに、『平家物語』を引用するスペースは十分に確保したのは、なぜだろうか？

もちろん村上春樹は意図的にそうしたに決まっている。

それは、『空気さなぎ』がほとんど具体性を持っていないことを、よりはっきりと明示するためだからだと思われる。

春樹は『平家物語』の長々とした具体的な引用を利用して、『空気さなぎ』の非具体性をはっきりしたかったのではないだろうか。

たしかにはっきりとするだろう。だが、非具体性を強調することに意味はあるのだろうか？ もちろんある。

内容はおいておくとして、作品『空気さなぎ』は『1Q84』の中でどのような役割を担ったのか？ 言い換えるなら、それが拡散されることで「1Q84」に何が起きたのか？

こう思う人もいるかもしれない。『空気さなぎ』はリトル・ピープルを生じさせたり、拡散させるような何かだったのだ。

いや違う。全く逆だ。ふかえりは反リトル・ピープルの存在（2-p276）であるだから、天吾

とふかえりのタッグで作った作品『空気さなぎ』もまた、反リトル・ピープルの何かであるはずだ。

リトル・ピープルは、『空気さなぎ』が出版され世に広まっていくことに腹を立てたことを、思い出そう。腹を立てるということは、それがルール違反であることと同じことかもしれない。

ルール違反は2つ。世に広めたこと、そしてそもそも、フィクションとして書き表したことだ。

リトル・ピープルが何であるかは、反リトル・ピープルが何であるかを知れば、あきらかになるだろう。そして具体性に欠いた〈中身の無い小説〉は、それを解く重要な〈鍵〉になることを言っておこう。

だが、我々は〈鍵〉を手にしたとして、それはどのように回せばいいのだろうか？

もうすでに、私は先に書いている。

それはスパゲッティをフォークで回すように回せばいいのだ。わからなければ、インターネットで検索すればいい。もっと具体的にいうと「恐怖のナポリタン」というキーワードで。あなたの前にリトル・ピープルが出てきても私は責任が持てないが。

あまり驚かすつもりはなかった。これは冗談。怖くなった人は、先を読んで安心して欲しい。これは文芸評論にすぎないことがわかるだろう。

さて、リトル・ピープルがなんであるかがわかったところで、次から『1Q84』の特殊な構造、シュルレアリスムたるゆえんを読み解いて行こう。



すごい上から、まさに大上段で来たね。わかりやすいし面白かったけど、この2013年4月12日0時、本屋が大混乱してる最中に、今さら前作の『1Q84』について熱く語って更に次回へ引っぱっちゃうあたりのウマシカさが特にカッコいい。ただの謎解きだけじゃなくて、現実社会にまで踏み込んだ分析になりそうだね。ちなみに俺も今やっと元ネタの『1984年』を読破。あ、まんがで読める方ね。でもちゃんと小説を読みたいと思わせる、まんがでもなかなか示唆に富んだ内容だったよ。

そこで、一つ質問がある。リトル・ピープルが牛河の死体を囲んで空気さなぎを編んでたシーンあるけど、空気さなぎはあくまで反リトル・ピープルってことでオッケーかな？ では次回、池上さんばりの「いい質問ですね」を期待するよ。

今回は俺も池上さん越えのわかりやすさを狙ったんだけど一つにまとまらなかった。だから開き直ってぶつ切りで掲載するから、Uがどの書き出しがいいか選んで。ってか別に選ばなくてもいい。ただ箇条書きっぽい内容になったので、そこはご容赦ください。

ちなみに予告編からのハングリーマーケットにご協力くださった希有な方々には敬意を表します。ウマシカの骨身を削った文章で深夜に小腹でも満たしてくだされば光栄です。

書き出し①

さて、前回『上手に囚人化された愚民どもの国』って冗談で書きすぎたんだけど、それがずっと引っかかってた。書き直そうかと何度も思ったけど、俺の中では言い過ぎじゃない、昔から根底でくすぶってた感情だと気づいてやめた。

他の国のことはわからないけど、この国に住んでてずっと違和感があった。

昔、政治家の汚職が大問題になった頃、「みそぎ」って言葉が流行り、自称「みそぎ」を終えた政治家たちが次々に再当選を果たしていった。俺には意味がわからなかった。みそぎって、あの人はいったいどんな罰を受けて、有権者は何を許したんだろうって。

それはずっと続いている。相撲の八百長、巨人のスキャンダル、自民党の下野、原発事故。何かが悪かったから、驕りがあったから起こった、その間違いを正そうって論調が当然のように報道されたけど、単にポーズだけで心の底では変革なんて求めてない。

世界でも最先端の首都東京から250キロ圏内で起こった、前例がないほどの原発事故。収束にあと30年以上かかる。復旧する作業員らは怖ろしくダーティな扱いのまま。特に作業員については今年も3月11日前後にいろいろ報道が出てたけど、二年経って扱いはより劣悪になってるみたいだ。例えば報道では、汚染され穴が開いた使い古しの作業着が支給されるとか、最低賃金が時給837円とか。1日12～13時間拘束され手取りは月16万円余り。もらえるはずの危険手当は支払われない。違法な偽装請負やピンはねが当たり前横行し、名簿や線量の管理もずさん。王様に雇われた奴隷みたいな扱いを受けてる。

国会でも作業員の待遇改善ってほとんど取り上げられない議題だし、この前出された「作業員に国民栄誉賞あげたらどうか」って意見に対しても首相は、「ここでは明言できない。とりあえ

ず前人未到の記録を残した人あげる賞だ」とか答弁してた。これ、組織票を持つ有権者に対してなら、たとえ嘘でも「気持ち的にはあげてもいい」くらいリップサービスするところだよ。権力者側から見たらいかに優先度の低いマイノリティかって証明だろう。むしろ一般国民のほうが立場に関係なく、原発作業員には感謝してる気がする。（そういえば前回、津波で亡くなった二人の東電社員の記載が抜けてたな。ちなみに東電の社員で事故関連で亡くなって報道されたのはどうも彼ら二人だけだね）

そこで俺はもう一步踏み込んで、「作業員の雇用を国が直接管理して月収100万円にする」法を通したらいいのについて思う。だって今検討されてる「40歳でリストラ」の法が通ったら、明日あそこで作業するのは俺かもしれないモン。でももしTPPで海外から安い労働者を呼んで作業員にする気マンマンだとしたら、今後40歳でリストラされた中年は作業員にさえなれないって悲喜劇なんだが。

とりあえず誰かが働かなきゃ国が滅ぶっていう福島原発作業員が劣悪な待遇のまま事実だけでも、原発がダーティな発電方式だって俺は思う。今までずっとそれで来たしこれからもそれで行く気なのかと思うと、例の丸刈り並みに気が滅入る。

とはいえ、みんな上手に囚人化されてるから、「ガッハッハ。そんなのこき使われる日雇い労働者が悪い。権力者側に立てば勝ち組、奴隷作業員なんて使い捨てだ」って笑ってるんだろう。なんて卑劣な民族なんだ、この国の人（俺含む）。そうじゃなきゃ、毎時一千万ベクレルのセシウムが漏れてる現場で、お国のために寿命削って日夜働いている人々に対して、月収百万ごとき逆に安いって思うよね、当然。作業員を軽視してる権力者の皆様方にとっちゃ百万なんてはした金ジャン。

というワケで少し脱線したけど、これだけの事故が起こって二年経った今でも、明確な責任を誰も取らない。しかも今頃になって、事故当時の冷却水は9割がた漏れてて燃料が空焚きになってたとか、まさにみそぎ期間を終えた情報が汚染水みたいに小出しに漏出してくる。苦心して張り巡らされた、責任を曖昧にする会議だらけのシステムが磐石に機能して、（汚）水を得た（汚染）魚の如く高い影響を及ぼしてる。何事につけ仕組みを作るほうは、怖ろしく大きな金と数の力で自分たちに都合良くごまかして伝えようとするから、俺みたいな愚民の関心が分散されて低きに流れるのは当然だよ。

事故直後に、「全作業員を撤退させる」って提案が電力会社から政府にあったかどうか、以前大きな問題になった。その話が二転三転してうやむやになった後、「全員退避はまだか。いつするんだ？」「今しかるべきところに確認してる」って会議で揉めてたビデオがニュースで報道された。でも追随するメディアはなかったし、そもそも俺が最近までその報道を知らなかった。

「中は暗いから行けない」って国民の代表である調査団を門前払いした電力会社の部長の件は、虚偽に虚偽に更に虚偽を重ねたが結局故意じゃないって弁護士の第三者機関が発表した。俺の趣味は最近国会観賞だから、その部長がビデオまで見せていかに暗く危険か偽装した、ってところまでは聞いた。まるでキスの現場を目撃され写真まで撮られても「キスだけど故意（恋）じゃない」って言い訳する浮気旦那に、更にその両親まで味方についちゃった、ってくらい間の抜け

た話だけど、この報道ももう下火だ。

少し前、テレビに出てる人たちがクスリで次々に逮捕されたとき、後ろ盾のない弱いタレント個人はコテンパンに扱われたが、業界に権力を持つ組織人はほとんど報道されなかった。最大手の新聞社に守られていれば、野球監督や選手のスキャンダルも表面上しか追及されないのと同じだ。

でもそんな社会を正そうなんて言うだけ無駄だ。ただそれを当然と受け入れてしまってるこの国の文化が、圧倒的な無力感に支配されている。その無力感がこじれて、叩きやすい「悪」を匿名でバッシングする風潮も生まれてる。

とはいえ、この国の人たちがまったく物を考えてない「愚民」ってワケじゃないと思う。右も左も社会悪をどうやって正そうか、割と真剣に考えてる。でも表立って社会の話をしたくても浮いちゃうし恥ずかしい。だからちょっとした正義の講義とかが人気になるのは、実は考えてるし話してみたいって証拠だろう。でもこの「浮いちゃうし恥ずかしい」って空気が実はもっとも上手い世論誘導な気がする。誰も物を言わない状態で、「みんな実はこう思ってるよ」って大量に報道されれば、まあそんなもんかって流されちゃうからね。

それに貧しく不満の多い国のデモはしばしば過激派とかになるけど、この国の人たちはそもそも裕福で、上手にコントロールされてるから、デモも趣味の範疇で収まってる。

だからこの国がもっと貧しくなれば、北欧の国みたいに投票率が90%くらいになって、若者も真剣に将来とか考え始めちゃって、若者向けの雇用や少子化や教育に関する改革を要求しだすかもしれない。まあ、そんなときじゃもう遅すぎるかもね。

でもここまで書いて思ったけど、別にこの国の今に特有な傾向でもない気がする。村上春樹や吉本ばななとかが世界的に流行ってて、あるいは『グレート・ギャツビー』や太宰とかもまとめて荒く言えば、「みんな何でなかったことにできるの?」って疑問が大きなテーマだからさ。疑問を持つ人は多いけど逆に流す人も多いから、多数決では相殺されちゃうんだろう。

たとえば俺自身の祖父母は「腹減った」とか「便所行きたい」的な欲求を発言するだけで、基本は虫と一緒に考えの考えだった。いろいろ考える人がいる一方で、虫っぽい考えの人がいるのはバランス的に当たり前だし、みんな同じヒト科のカテゴリーで人権持って生活してる。更に言えば、より深く考察する人種も右から左まで千差万別だから、権力者はただ国民同士が争う種だけ蒔いておけば、上手に漁夫の利を得られる仕組みになってる。

そしてこっからだいぶ本題に入ってくんだけど、TPPも原発も、争う種が見事に育ってる。争いを横目に政策は粛々と予定通りに決められていくし、決定した政策が後に失敗しても「争いに配慮して甘めに決定したから」って理由にできる。現に、「原発を絶対安全って啓蒙して、避難手順等の危機管理を厳しくしなかったのは、少しでも危険を煽ると反対派が騒ぐから」って言い訳もあったくらいだ。争いさえあれば後でツジツマ合わせられる好例だ。

とはいえ、俺ごときが偉そうにこんなところでウマシカ刀を振りかざしてみたところで、世の中

はピクリとも動かない。それに誰かを非難するつもりも毛頭ない。

ただ俺はこの国の文化に、一石は無理でも一放射性物質くらいは投げたいんだと思う。世界の片隅で、目に見えないくらい小さな毒を無主物として放出するから、ネットを介して放射性ウマシカの汚染マップが少しでも拡大すれば面白い。

書き出し②

現在、この国は公平さよりも金と感情を中心に回ってる。回してるのはもちろん国民だが、金も感情も公平さも等価で扱いたいと俺は思ってる。

そこで今回はTPPとか消費税に関して、俺に見える事実を挙げてこの時代、この国の空気を文学的に読み解きたい。ちなみに俺個人の賛否は表明しない。賛否で争っても右や左に回収されるだけで決定は変わらないし、我々が流れにどう対応すべきかが書きたいから。そのヒントは賛否ではなく「現状とその後の把握」にしかないと思う。

たとえば、「決められる政治」って前政権からの流れで、消費税増税とかTPP参加がさも苦渋の英断しましたって美談になっちゃってる割に、国論がいまだ二分されてるのはなぜか？

これについては本題に入る前に、俺が目撃してるTPP関連のくだらない話から書きたい。

大手検索サイトのニュースには誰でもコメントを書ける欄がある。そこで現政府LOVEな人たちが大量に書き込みしてて興味深いからまめにチェックしてる。いわゆる「ネトウヨ」とか呼称されそうな人らなんだけど、とにかく彼らは現政府のニュースには絶賛の嵐、賛成ボタンも半端なく押されててランキングも上位にすぐ来る。逆に現政府への批判コメントは反対ボタン押しして潰したり、ご丁寧に「反日国家」への差別語をたっぷり添えて反論したりする。

その統制たるや見事なもんだよ。まずニュースが掲載されてからコメント投稿は即時、必ず誰かが張り付いてる。んで、コメント多数で数千回賛成ボタン押すニュースと、コメントもボタンもまったくスルーなニュースはちゃんと選別されてる。いったい誰が組織してんだろうね？

まあそれはいいとして。興味深いのはTPPについて、現政府が強く推進してるから今までなら「TPPサイコー」「交渉参加で間違いない」「絶対国益倍増」みたいなコメントと賛成多発の流れなのに、フタ開けたら逆にスルーなニュース扱いなんだよ。コメントもボタンもスルーだから注目度も低いし、「TPPヤバイ」「治外法権」「奴隷国家」あげくには「売国奴総理」なんてコメントが、賛成ボタン多数で上位に放置されてるワケ。

政治まったく関係ないご近所のほのぼののニュースでさえ、最終的には「反日国家が悪い」ってオチにもってくほどの彼らがなぜそんなニュースやコメントを放置してるのか？つまりTPPは彼らの内でも意見が割れてるから、判断を保留してスルーなんだ。（まあ、国民が保留したり争ってるうちに権力者が都合よく決めちゃう、いつもの流れなんだろう）

今のは狭い世界のくだらない話だけど実際に国全体として考えても、TPP参加や消費税増税、金融緩和や原発再稼働、沖縄の基地問題、それら全部の政策に対して「そもそも国益とは何か？」って話にまで行き着いてる。だって国民全員が絶対得する話じゃなくて、決定次第で損する人も多数出るだろうって政策だから。誰が得するのか？ってか俺を優先しろって国民は揉めるワケだ。

ところが、それら政策の決定を漏れなく歓迎してる勢力がある。もちろん国民はみんな気づいてる、某米国政府（とその多国籍企業）だ。彼らにとっては全部、ウェルカムな決定だ。某国政府のご立腹に逆らってもこの国の政府が英断を下したゾ、って政策は今のところ一つもない。そんな報道、聞いたことある？

この単純な事実から考えて、国論が二分してる理由は、政府は国民の世論をまとめるのは二次で、別の意向を最優先してるからだ。そこで、やっぱ他国に守られてるからこうなるんだろう、だったら独自で国守るために核持とうぜ、そのために原発持とうぜ、って右に展開するワケだ。とは言えそれも某国政府から「ダメ、ゼツタイ。核、カッコ悪い」って指導されたら肅々と左に寄るだろう。弁当箱みたい。

揺れっ放しの弁当箱がいったい何を決めるって言うんだらう？

実際には、原発事故で汚染されたゴミの仮置き場も中間貯蔵施設も強制避難民の将来も決められない。農業改革もTPPに頼らないとできない。（首相はインタビューでも国会答弁でもTPPと農業について「ピンチをチャンスに」ってはっきり明言してて、農業を一旦ピンチにしてそこから輸出産業に転換しようって話なんだろう。本当はピンチなんか招かずに改革を実行するのがベストなのに、組織票を敵に回したくないからTPPの外圧で仕方なく農業を変えようってオチだ。例えばTPPを推進してる野菜の種を売る某多国籍企業がフランス映画等で批判されてるけど、俺が連想したのは昔、教科書に載ってた『繁栄の花』って、異星人が蜂を売りつける星新一のブラックなショートショートだ。そういうでっかい外圧に対抗するためには改革せざるを得ないんです、って説得したいワケだ）

もちろん一国の中にもいろんな勢力があるし簡単な要約は不可能だけど、俺のウマシカな目から見えるTPPを乱暴に超訳すると、元々小さな国々の枠組みに某国政府が首突っ込んで、「いいから俺も仲間に入れろよ。ついでにお前らも来いよ」って気づいたら輪の中心にいるっていう、まさにジャイアンの法だ。米韓FTAって条約と並んで、某国政府が日韓に首輪をはめた気がする。要は中国を発展させて金儲けしたいから、日韓は出しゃばんなよって先手を打った感じ。生かさず殺さずを法にまとめといたから、そんな中でなら好きに競争していいよ、的な。

更に弦楽器イルカ『2014』（ゼロじゃなくてオー）内に描かれたパラレル・ワールドでは、米中は経済を軸に少しずつ関係を深め、大半の企業がこれからは中で儲けたいと考えてる。今までの露や中は米に対抗するため「北」の存在を利用してたけど、露米中がどんどん接近して権力者に経済的な旨味が増すと、逆に北の使い道がなくなる。更に、韓の新しい政権は対話重視で本来は半島統一っぽい雰囲気もあったけど、半島が統一しちゃうと一番困るのは実は北の権力者ってオチだ。統一したら行き場がなくなるから。中の内部にもいろんな勢力があるみたいだけど、北を今までほど強くは擁護しなくなってきてる。日中韓が争いながら米の手の内に収まりつつある中で、北は相当追い詰められてる。ただ、米の軍縮と中の経済安定の波にうまく乗れれば、北はこのまま延命が可能かもしれない。北が延命して脅威になり続ければ、日は米に従属して守られる口実ができるし、そこから核武装までいけるかもしれないからそれはそれでハッピー、って権力者は思うかもしれない。

以上、ウマシカな妄想から得られる結論が少しでもあるとすれば、結局は一人ひとりが生き残る工夫して頑張るしかないって当たり前の教訓だ。自分が儲けられるなら儲ける。逆に外資に倒産させられたら別の会社で働くしかない。

そうやってモロモロ考えたときに、村上龍『55歳からのハローライフ』は、これからの老後を考える上で素晴らしい参考書だと思う。『最後の家族』が初期からの龍を総まとめにしたひとつの到達点だとすれば、本作も『13歳のハローワーク』以降をまとめた到達点じゃないかと思う。まあ龍の本はそこまでたくさん読んでないから大きなこと言えないけど。

タイトルが狙いすぎで小説に似つかわしくないって意見もある。でも55歳、またはその周辺世代にとっては図鑑的なノンフィクションよりも、むしろ小説形式のほうが仕事だけじゃなく私生活まで自分と比較して、よりリアルに切実に身にしみるのではないかと感じた。ある意味では『バトル・ロワイヤル』より戦慄するよ。そういう意味でマニュアル本的にも読めるから、適切なタイトルじゃないかな。

ちなみに、龍は昔からホームレスを「進化してない」ってすごい否定してたイメージだけど、そこはちょっと丸くなってると感じた。また「本来はこうあってほしい、こうなったらいいな」って世界を描くのが龍の真骨頂だと思うけど、それが『五分後の世界』みたいにガチガチじゃない。「熟年離婚寸前の夫婦に訪れた危機を、改心した夫の告白で回避する話」なんかは、「私と同世代の男性諸氏よ。奥さんにはこのくらい優しい言葉をかけるのが男の甲斐性じゃない？」って、鼻の穴を若干広げて主張する龍の姿が背後に見え隠れする感じ。

そこリアルかって問われたら、たぶん龍の世代であんな優しい言葉を奥さんに向けられる夫はリアルじゃないと思う。龍だったら言葉があるだろうけど、一般人なら何らかの暴力が出たりする場面だよ。とはいえ、いい本だってことは間違いない。

書き出し③

Uが原発賛成派、俺はエセ反対派だから、今回は二人の妥協点を探せば新しい発見になると思った。よくネット上で両派が罵り合って人格否定してるのを見るけど、それは「同じ地域でも賠償金額に差をつけて住民を分断させ、団結を阻止する」電力会社の手と同じだ。

原発推進と核開発は別の主張だ。そして脱原発と反核も別の主張だ。でも実際は、核武装したい人は原発推進派で、反核が脱原発派になってる。それで結局この二つは対立しても相殺されてしまう。

でも推進派はこのまま再稼働の流れに乗れそうだと見込んでる。だから脱原発派はとりあえず推進派との間で、脱独占とかの妥協点を見つけておかないとこのまま流されてしまう気がする。

ただ、今回の原発事故で被害にあってる人たちは、将来の核武装や反核より目の前の事故処理や放射性物質の処分が問題なのに、今のところ何も決まらないまま流されてる。それが現状じゃないかな。

さてここでエセ反対派の俺から、風評って言葉が二年以上経った今でも都合よく使用されてる

けど、いい加減「逆風評」だから使わないほうがいいよって問題提起したい。

今回の事故と関係なく、風評って言葉だけで俺が連想するのは、「根も葉もない噂」だ。また辞書だと風評は単なる「噂」を指し、風評被害は「根拠のない、つまり根も葉もない噂による被害」ってなるらしい。

でも今回の原発事故に関して言えば、これは風評じゃなく根と葉のある実話だ。だって間違いなく爆発はしたんだから。更にもう実がなってるって主張する人もいる。

とりあえず公的に調査された内で小児甲状腺がんは今のところ38000人中3~10人。その事実をどう取るかだけど、推進派だから何でも安全、反対派だから何でも危険って主張はフェアじゃない。

とにかく実はなってませんって推進派は言いたいんだろう。ならせめて「微量セシウム被害」にでもしたほうがいい。「微量の放射性物質が含まれたゴミや食べ物は科学的には安全だけどわかってもらえない被害」をわかりやすく言うとそんな感じだろう。でも繰り返すけど、少なくとも風評ではない。「毒がない食べ物と、ちょっとだけ毒が入ってるけど安全な食べ物、あなたならどちらを食べますか？」って話だから。

もし仮に（弦楽器イルカ『2014』で描かれたみたいに）、原発の爆発は車の事故並みに日常茶飯事、既にあっちこちでドッカンドッカンだけど特に健康被害なし、しかも今回で祝100発目！とかなら「またか」「風評だ」「た~まや~」って不謹慎すぎる発言もあるかもしれない。でも、現実はそうじゃない。原発は絶対安全、絶対爆発しないものだった。それが爆発したのに風評ってのは、言葉として絶対絶対適切じゃない。とは言えこの世に絶対なんてないから、みんながいいならそれでいいけどね。

書き出し④

現代日本の高齢者は神なんだって俺は思ってる。信仰の話ではなくて認識の話だ。

前に俺が書いた物語の中で、長生きすぎて、「もういい。十二分に生きた。逆にこれ以上生きたくない。そろそろ死にたい。むしろ余命が迷惑だわ」って満足しすぎて死ねる人間は神って定義した。それは生物として真っ当なのかと疑問を持ったからだ。

「まだ生きたいけど死ぬのは仕方ない。仲間のために犠牲になろう。後は若者にまかせて身を引こう」。大半の野生生物はそういう感じで死ぬんじゃないだろうか。

それに本当はみんな知ってるんだよ。これからこの国で起こる大きな問題のほとんどは、高齢化社会に関することだ。もし国家を主語として考えたら、国民の平均寿命を60歳に短縮すれば高齢者がいなくなってぐっと若返り、医療費も削減されて年金も保障もすっきり、若者にもっと社会参画が求められて、人口減少を食い止めるため子供もたくさん産めって支援されて、40~50歳定年も当たり前、って社会になるだろう。

でももちろん国家の主語は国民なのが通常だから、国民の長寿は肯定される。世界には平均寿命が40代後半の国もあるけど、逆戻りは許されない。

ただ万が一、医療の進歩よりも先に病気を進歩させればどうだろう。医療が追いつかないくらい強い病気になるシステムを構築するために、被曝とか不健康な食生活を推奨したらどうだろう

。だって例えば原発の三原則、「停める。冷やす。閉じ込める」の、「え、閉じ込めるってあったの？」って空気であり大気じゃん。ダダ漏れ上等だし、福島で給食を子供に食べさせたら補助金出る制度とか、もう素敵やん。役所や刑務所、あるいは老人ホームとかじゃなくまず弱い子供を狙うところ、感動やん。冗談だよ。

みんな気づいてるのかな。「嫌なら出てけよ 俺は好きさ日本」って踏み絵を日々させられてるってことに。ある日気づいたら、「アナタが昨日まで好きで受け入れてたのは、原発が爆発しても当然って利権の国だヨ！」って権力者達が（某アイドルっぽく）並んで、一斉にてへべろ(・ω<)してたのにさ。もう忘れたのかな。

書き出し⑤

さて、ニワカウマシカの俺がついでに経済を語るのもどうかと思うが、文学的に例えるとバブル崩壊ってのはつまり、「王様は裸だ！」って瞬間だ。実体経済と金融経済が乖離して、裸なのに着飾るように見えるのがバブルだ。

月一回、米国の雇用統計の報告ってのがあって、米国の雇用状況が好転してるか悪化してるか、それによって株や為替が上がったり下がったりする。ついこの前それがあったんだが、米国の雇用は前月より悪化してて、本来なら円高ドル安の流れだった（その雇用統計自体が粉飾済みって話もある。統計なんて切り口次第だから）。しかし逆に急激な円安ドル高が始まった。ドルと円の金融緩和を信頼した投資家が円安を支持したからって話だ。

この乖離が広がれば、王様のでっぴりと太った裸体をおがめるだろう。もちろん今後、実体経済が回復して乖離がなくなれば、王様は服を着れるワケだ。

金融緩和で急激に円が増えて物価が上がるってことも、文学的に例えれば、洪水や津波と一緒に。固定された貯金は地面に建てられた家と同じで、物価が上がって水かさが増すと浸水したり最悪流されたりする。そこで投資の海に船を浮かべれば少くらの波には対応できるし、インフレの津波でも思い切って沖まで漕ぎ出して避けれる場合もある。ただ、庶民の船なんて手漕ぎボートみたいなモンで、結局でかい津波にはのまれるしかない。でかい波を避けれるのは世界一周できる大型フェリーみたいな金持ちの船だけだ。

そう考えれば一般的に円安や金融緩和を評価してるのは俺みたいな貧乏人じゃない。経団連や某国政府、いわゆる権力者側だ。金持ちはより金持ちになれるチャンスが増えた。それでも暗く貧しい生活に不平を言うよりは、進んで船出して灯台の明かりを探すほうが若干マシかもしれない。いや、食べ物にされるだけでそれほどの意味はないのかもしれない。

でも王様が裸なら、洪水もきっと幻だろう。黙して待てばやがて水位は下がるかもしれない。いや、その時にはもう住めない土地になっているのかもしれない。

さて、話がぐるっと回ったけど、そこがどこであれ、とにかく力を集めてやってくしかないってオチを付ければ、大体ハッピー・エンドに見えるだろう。人生は暇つぶしだから、生まれたからには仕方なくやってくしかない、ってオチだ。

とりあえず今回はこんな感じ。
どうかな？



考えるウマシカ～第六回 『55歳からのハローライフ』と彼と巡礼と帯～

<http://p.booklog.jp/book/69528>

著者： 弦楽器イルカ+友人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/69528>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/69528>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ